

水 井 戸 の 話

⑭

井 戸 職 人

村 下 敏 夫

いまは故人となった早川松五郎さんがむかしばなしとして「井戸やと人間が喧嘩していた」とか「井戸やは人間でない」とよく言っておられた。

井戸掘りをいやしむ思想は遠いむかしにもあったようで さきごろ酒井軍治郎さんが「古今著聞集」にある一節のある雑誌で紹介しておられたので ここで拝借することにする—

藤原忠通の子基房（松殿といわれた人）が摂政の時 秦兼国という近衛の舎人の下役がいた。日頃身なりかまわずむさくろしい姿をしていたが 多少役に立ちそうな人物なので 基房が彼を近衛の侍に起用しようと思った。ところが舎人の頭をしているものが 兼国が自分よりも上の位になることを快く思わず 彼には欠点（瑕瑾）があるといわゆる中傷した。基房がどういふことかと尋ねたところ その頭が次のように答えた。

「兼国あまりにもわびしき者にて 後園にみづから井戸を掘りたるものなり」

鳥羽法皇と常徳上皇とが不和であった時代の話だから 今から 815 年前のことになるが 上のことばには 当時は井戸掘りがいやしい仕事だと考えられていたような疑いがある。幸いに基房はその中傷を一笑にふし 「身につかれたる瑕瑾なし。よくいひごとのなればこれ是をば申すため」といって兼国を起用したのである。

人は 仕事の性質上身なりのひどく汚れる商売を嫌う。そしてそういう仕事をしている人たちをいやしいとみることさえある。井戸職人は なつば服に地下たび 泥と油にまみれて 井戸を掘る。若い人にはなじめない労働であるかも知れないが 飯場 作業場からぬけ出た時の彼らは りっぱな紳士であり 先輩として十分に尊敬できる人たちである。

もしあなたが自分の土地に井戸を掘ろうとするとき どのような会社と契約されるだろうか。多分「経費が安く 地下のことだから信用できる会社へ」とお答えになるだろう。私は少し違った答え方をする。井戸は会社が掘るのではなく職人が掘る。職人の腕次第で

よい井戸ができる。だから心得ている人は 職人を指名して会社と契約する。そうすれば満足できる井戸が掘れて 多額の工事費を支払ったかがある。どの会社にも 虎の子のようにしている職人がいる。会社も営業成績 お得意さまへのサービスを計算に入れて それ相応の職人を融通している。信用がおける会社というのは 腕のよい職人をそろえている会社のことである。

わずか 2 m 四方ぐらいの櫓の下で 1 本のロープに伝わってくるビットの羽先の感触に全神経を傾けて 掘っている地層が粘土だ やわらかい砂だ 玉石だと見分けそして孔一杯に貯めてある泥水の表面の動きから水層の位置を確かめている人——それが井戸職人である。その親方ともなると 長年この道で苦勞してきただけに豊富な経験をもっている。櫓のきしむ音 ロープの張り方など細かい事に気を使い 他方では振動や騒音で隣り近所からの苦情も聞かなければならない。会社の営業面と工事面をかねた いわば社長代理である。

評判のよい職人は 絶対に仕事を急がない。会社との契約もあることだから 井戸を早く掘ればそれだけ入りもよかろうと思うけれど 慎重そのものである。マイペースである。1 日分の作業を終えると さっさと井戸掘りを止める。といっても遊んでいるのではない。小道具の点検 ロープの破損の検査 ビットの羽先の焼き入れなどに 余った時間を使う。こういう人は「段取り」がうまいというのか いざという場合にはすぐに間に合うように準備している。井戸掘りを急いだばっかりに孔が曲がって 鉄管（ケーシング）を入れたら途中でつかえて 孔曲りを矯正するのにさらに何日も手間どるとか 掘っている最中にビットが抑えつけられる事故に会ったとき 道具をわざわざ会社まで取りに行っていたのでは 処置する時間がかかりすぎて さらに別の事故を起こし改めて井戸を掘り直す という事にもなりかねない。だから 会社は職人に任せ切りだし 少々仕事の能率が予定より悪くても黙っている。

井戸を掘るときには 泥水が使われる。これらのよし悪しが 水の湧き方に微妙な影響を与えている。泥水は 掘った孔が崩れないように保護し 掘り屑を浮かばせておく役目をしている。井戸の深度が 1,000 m も 2,000 m にもなってきたのは 泥水の改良によってである。そこで石油や天然ガスの掘きくには 泥水の性質がやかましくいわれる。泥水のかげん次第で 今までさんざん苦勞してきた井戸掘りが スムーズに進むものである。井戸が深くなると 孔の崩壊が恐ろしいので 比重を上げるために泥水を濃くしたがる。若い職人ほ

どそうである。

泥水は 井戸の掘さくになくはならないものであるが 揚水の段階ではむしろじゃまになる。水が湧き出る帯水層にへばりついている泥は 少々機械的な衝撃ではとれない。泥水は 掘さく時間や地層の透水性に比例して10cm 20cm あるいは50cm も深く帯水層の中に浸透している。透水性のよい帯水層ほど 泥水の浸透がよい。よい職人は 経験的にそれを心得ている。

深井戸を掘ったときに使用した泥の量と井戸仕上げの段階で排出される泥の量とを比較すると 井戸から出る泥の量がいかに少ないかわかる。ということは それだけ地層の壁にへばりついて残っていることになる。

ストレーナーの開孔面積が2% 5%では帯水層の泥壁が若干おちて 水みちがついているにすぎない。ストレーナーの開孔面積を少しでも大きくしようとする努力がこのところ流行しているのは この辺の事情によるものである。

地震で 井戸から大量に泥水がでることがある。古井戸のケーシングを抜き上げたときに 泥がじゃりといっしょにコンクリートのようになくなって ストレーナーの周囲にくっついていることがある。これらは掘さく中の泥が残っていてわざわざしたものである。掘る時にぜひとも必要な泥を 井戸仕上げの時にいかにうまく取り除くかという技術が 井戸職人の腕ともいうべきものである。

井戸職人——彼らは小さな町工場のようなものである。一つの井戸を掘るのに 建築 電気 配管 熔接 そして機械のこと一切を知っていなければならない。釘一本も使わないで飯場を作り上げるもの 電気のことならモーターの修理にまで明るいもの 熔接ならどんな材料でもこなすもの——何を好きこのんで「人間でない」とまでいわれた井戸職人になったのかと 考えることもある。しかし彼らには われわれの知らない喜びがあるのだらう。どんなに年数の入った人でも「井戸は一つ一つがはじめてみたいだ」という。苦勞に苦勞を重ねてやっと掘り上げた井戸から 水が噴き出たり 大量に揚水できたりした時に ほんとうの喜びがあるのだらう。彼らは 水の出が悪い井戸についてはあまり多く語りたがらないし 水の出がよくない場所へは井戸掘りに行きたがらない。今では使えなくなった尺貫法も水井戸の場合には ある意味において便利でありまた満足感を与えてくれていた。1日1,800m³の水量というよりも10,000石と言った方が はるかに水量豊富に聞こえる。180mの井戸というより 600尺の井戸といった方が深く感じられる。彼らの自慢は 深くて水量の多い

井戸を掘ったことである。職業は違っていても これと同じように無から有を生み出したとか 新しい事実を発見したとか——考えようによってはばかばかしいことに 男は生き甲斐を感じるのかも知れない。

井戸職人には 他の建設業にみかけるような いわゆる徒世人はいない。れっきとした者ばかりである。現場へ通うにしても セビロにネクタイで 井戸職人とはどういえない。

彼らの出身地は 80%までが新潟県である。上総掘りの発祥の地といわれた千葉県には案外井戸職人が少ない。新潟県については秋田県 愛知県である。新潟県出身者が多い理由には 石油掘りが関係しているように考える。日本で古くから開発されてきた油田があるのも そしてロータリー式やパーカッション式の掘さく機械が明治時代から動いていたのも 新潟県である。長岡市が機械工場の町として栄えてきたのは 油田に関係があったと聞いている。この辺から三条市 新津市にかけて 井戸職人がわんさといふ。

ここまで説明すれば 井戸職人の人柄を想像して頂けると思う。彼らは 盆と正月をいなかで過すのを楽しみにしている。井戸職人のなかには 親子 兄弟 親類と血縁のつながっている者も少なくない。

井戸職人は 時代の流れにしたがって 変っていくかも知れない。むかしのように親方にしごかれて一人前になるというようなことは 思いもよらないことである。むかしじこみの職人は 掘り上げた地層の色や岩石の種類を根気よくノートしていた。最近の衆は 水井戸は水が出ればいいんだという考え方になってきた。たしかにそうである。それ以上のことを要求するのは 無理かも知れない。長い間櫓の下で 汗まみれになったり 北風に鼻みずをすすりながら掘りつづけてきた井戸から少しでも多くの水が出るように願うのは 彼らが一番であらう。

水ができればよい——という根性に徹しているのは 大阪のようである。さく泉会社の気質をみても 関東と関西とではまるで違ふ。いわゆる職人的気質をもっている者は 大阪では生きていかれないかも知れない。そしてお得意さまから名指しされて りっぱな井戸を掘る職人は 次の時代には生まれてこないかも知れない。——やっぱり職人は小さい時から仕込んだ方がよい——という時代は過ぎてしまったようだ。

(筆者は応用地質部)

切手を集める人のために

(8)



堀内 恵彦

似ているが ちがう切手②

2. 切手でない切手

「切手でない切手」とは変ないい方ですが 切手として売られたものではないが 料金額面を切り取って 切手として使ってもよい という条件のもです。

(写真A) に示すハガキに貼ってある10円相当の額面は「簡易手紙」(写真B)の料額を切り取って使ったものです。現在売られている「郵便書簡」は売価15円で料額の切り取り使用はできませんが 写真のものは料額10円のを12円で売ったために そのようなことがゆるされたものです。

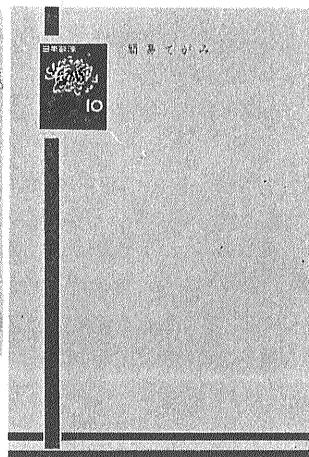
これと同じようなものに 戦時中に奨励された貯金を郵便切手で行なえるように売り出された「郵便切手貯金台紙」(写真C)の料額面 また戦後 物資の不足時代に売り出された「切手付封筒」の料額面などがあります。このように切り取って使用されたものは少ないですから みつけたら そのままの状態で(はがしてはだめ)保存しましょう。

3. 外地局で使用された切手

日清戦争以降わが国は韓国および清国(中国)内に在留する邦人やわが国と文通する人々の便宜のために 諸外国と同様に わが国の郵便局と全く同じく郵便事務を行なう在外局を開設しましたが それらの局では 日本貨のほか韓国または中国の通貨で 等価(拾銭または老角をわが国の拾銭とする)で郵便切手を売りさばいたため わが国とそれらの国の貨幣価値の差(かわせ相場ではわが国通貨の方が価値があった)を利用して 在外局で現地通貨で切手を買入れ それをわが国に持ち込み



④ 簡易てがみの料額を切り取り使用したもの



⑤ 簡易てがみ



⑥ 郵便切手貯金台紙



⑦-1 朝鮮



⑧-1 朝鮮



⑧-2 台湾



⑧-3 台湾

使用し あるいは局に買い戻しを求めるものが増加した(これで利益をうる)ので これを防ぐため 明治33年1月より切手に朝鮮または支那と赤または黒で加刷(印刷を加えること)して売りさばいたものが 写真Dに示すものです。

韓国における朝鮮字入り切手は 明治34年3月限りで売りさばきを停止し 支那字入り切手は 大正11年12月の在支局の撤退とともに売りさばきを停止しました。

なお この字入り切手には にせもの も多くありますので注意してください。多くは消印で区別が付きます。

(筆者は元所員 現科学技術情報センター)